2018.4.29　復活節第五主日

わたしはぶどうの木

ヨハネによる福音 15:1-8

（そのとき、イエスは弟子たちに言われた。）「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。わたしにつながっていながら、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる。しかし、実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる。わたしの話した言葉によって、あなたがたは既に清くなっている。わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていなければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていなければ、実を結ぶことができない。わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。わたしにつながっていない人がいれば、枝のように外に投げ捨てられて枯れる。そして、集められ、火に投げ入れられて焼かれてしまう。あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたの内にいつもあるならば、望むものを何でも願いなさい。そうすればかなえられる。あなたがたが豊かに実を結び、わたしの弟子となるなら、それによって、わたしの父は栄光をお受けになる。

説教

聖書には動物や植物のイメージが効果的にでてくることがあります。とくにヨハネ福音書では喩えとして上手につかわれます。先週はひつじ、今週はぶどうがイエスさまのイメージを表しています。

ヒツジはふわふわ、ぶどうはツルツル、かわいいね、おいしいね、なんてホンワカしていると福音はいきなり突き落とします。羊はオオカミに襲われ、実をつけないぶどうの枝は切り落とされます。

わたしにつながっていながら、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる。しかし、実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる。15：2

このぶどうの喩えでは、イエスにつながっていながら実がつかない人は取り除く、しかし実がつく人はもっと良くなるように手をかけると言っています。だから、わたしにつながっていなさい、とヨハネ福音は続けます。実がつくか、つかないかは神がお決めになる、とにかくつながることが大切だよと言っているようです。これだけ聞くと、ずいぶんなことをあけすけに言っているようですが、きょうの福音はイエスの告別説教と呼ばれているヨハネ１３章から17章にかけての長い説教の一部です。最後の晩餐のあと、切迫する状況で語られた説教の文脈からみれば、イエスのことばの重みを感じます。告別説教のあとイエスはエルサレムで十字架につけられます。

ことわざに言う「親孝行したい頃には親はなし」イエスの弟子たちは本当の意味でイエスを知ることなくイエスは磔刑の露となっていました。いきなりというより予告どおり弟子たちは「親はなし」状態になりました。

「墓に布団は着せられぬ」ともいいます。弟子たちは墓にふとんをかぶせたのでしょうか、そうではなく自分たちがふとんをかぶってユダヤ人たちの報復をおそれてブルブルしていました。そしてそこに復活のイエスが弟子たちを励ましに現れました。その励ましにこたえる形で宣教活動がはじまり、その活動拠点として教会組織が誕生していきます。ふとんをかぶっていても、ふとんを墓にかぶせてもなにも始まりません。ましてそこには意味はありません。わたしたちはとってはイエスにつながることが肝心です。

わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。ヨハネ１５：５

こうイエスが宣言するとき、わたしというのはイエスさまご本人であって教会組織ではありません。教会はイエスの墓にふとんをかけるための組織ではなく、復活のイエスを記念する組織です。父なる神が手入れをされるのはイエスの木につながる枝であり、その枝にみのる実、すなわちわたしたち一人ひとりです。祝福がわたしたち一人ひとりの上に豊かにありますように。